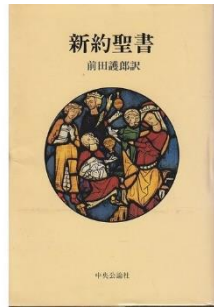


愛に生きる…愛とは何ぞや？

西村 公伸（機械工学科）



新約聖書/前田護郎訳
中央公論社 1983

本学が掲げる教育の目的は、「人に愛される人、信頼される人、尊敬される人を育成すること」にあります。

さて、そのためにはどうすればよいのでしょうか。「信頼される人」は、「期待に応じてくれる人、何かその人に頼るとき、期待した通りに物事をなしてくれる人」。「尊敬される人」は、「人のため、世のために偉大なこと、役立つことを行う人、人の模範となる人」といったところでしょうか。では、「愛される人」とはどんな人でしょうか？そもそも「愛」とは何なのでしょう？国語辞典によると、「信頼」は「信じて頼ること」、「尊敬」は「尊び敬うこと」と意味が唯一決まっていますが、「愛」は、①かわいがりいつくしむこと、②男女が思いあうこと、③その価値を認めて大切に思うこと、④神が人類に幸福を与えること（「角川国語辞典」より）とあります。愛については少々異なる意味合いを含んでいると言えます。ギリシャ語でも「愛」を表す言葉はいくつかありますが、よく知られるのは「アガペー」と「エロス」です。「アガペー」は前述の④に相当する意味合いで、「エロス」は①から③に相当するといえるでしょうか。言い換えると、「エロス」は「自己愛、自己の欲求を満たそうとする愛」であり、「アガペー」は「無償の愛」といえるでしょう。

ここで、「愛される人」で言う「愛」とはどんな愛でしょうか？①のペットのようにかわいがられる人でしょうか？それとも②の愛人関係でしょうか？あるいは、③の価値が認められて大切にされる人でしょうか？おそらく、③の「価値を認められて大切にされる人を育成する」が本学の教育の目的に最も合っているように思われます。しかしそれで良いのでしょうか？その人に価値が見いだされる間は愛されるが、その人の価値がなくなると捨て去られるという怖い状況を思い浮かべざるを得ません。これは、「エロス」の世界です。

さて、私が繰り返して読んでいる本の中で最も回数が多い本を紹介させていただきます。それは、「聖書」です。聖書については多くの解説本が出版され、どんな本かについても無数の書評がなされていると思います。聖書は、今から4000年以上の昔から2500年前ころまでの書簡を集めた「旧約聖書」と約2000年前の書簡を集めた「新約聖書」からなる、いわば、ユダヤの古典です。日本の古典、日本書紀や万葉集などより古い古典です。当然現代語に訳されていますが、読んで真意を理解するのは困難です。そういった意味で、多くの解説本が出版されています。旧約聖書は、モーセ5書と言われる律法の書、人類（ユダヤ人とその周辺の民族）の歴史、人の思いをつづる文学（讃歌）、（神）が人類に告げる預言からなっています。多分、読んで面白いのは、歴史の書でしょう。ダビデやソロモン、エリヤやエリシャ、ダニエルなどなど、最近のアニメにもその名を見かける人たちが登場し、生々しい人間の姿が描き出されています。一方、新約聖書は、福音書と呼ばれる「イエス・キリストの伝記」、弟子たちの伝記と手紙、そして黙示録からなっており、神がどれほど人間を愛してやまないかが描かれています。

ユダヤの古典ですから、ユダヤ教の神（といっても、キリスト教やイスラム教の神と同一）について書かれた文学で、ある約束事を知って読めばよく理解できるようですが…。さて、聖書は全体を通して、神の人間に対する愛を描いたものといってよいのですが、それを理解するのは困難です。そこで、ここではその最も分かりやすい（と私が思う）表現を新約聖書から紹介しましょう。

ヨハネによる福音書：第三章 16 節「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛してくださった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで永遠の命を得るためである。(口語訳聖書より)」神が人間を愛して大切に思っておられるからこそ、人間の努力や能力によらず、神の恵みの故、イエス・キリストによる十字架の贖罪を信じる信仰によって救いを得るといことです。

ローマ人への手紙：第八章 38-39 節「わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も私たちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、私たちを引き離すことはできないのである。(口語訳聖書より)」神の愛は、この世のどんな力やどんなもの、富や貧困、どのような環境にあっても神の愛が降り注がれ、満たされてやまないといことです。

聖書の世界では、主体は創造主なる神です。私たち人間が神を愛したのではなく、創造の最初から神の愛の対象として人が創造されたのです。本来は、神の愛の理想をこの地上で実現するためにエデンの園に人を生まれさせたのですが、人は罪を犯し（原罪）愛に生きることができなくなったわけです。そのため神は契約を結び、人間が愛に生きるために守るべき掟（十戒）が与えられたのです。この掟をもとに生活の中でしてはならないこと、守るべきことがきめ細かに決められてそれを守っているのがユダヤ教の人々といつてよいでしょう。さて、新約聖書の世界はというと、キリスト・イエスの出現により、人間はこれに近づくことすらできない絶対的聖なる存在であった旧約聖書の神が、実は、「愛にあふれる父」なる方であり、子が父に願い事をするよう「祈り」を以って神と対話ができるとイエスによって紹介されている。この「祈り」の仲介者が聖霊（聖なる神の霊）で、この聖霊は、神の御子キリスト・イエスの贖罪を信じ受け入れた者に内在して人を真理に導く働きをするのです。（キリスト教では、父なる神、子なる神、聖霊なる神の3つの形をとる神の本質は同一である：三位一体の神とされている）新約聖書は、キリスト・イエスの生涯を記述した「4つの福音書」と弟子たちの伝道の様子を表した「使徒行伝」、弟子たちが教会や信徒に送った手紙、預言書「黙示録」から構成されていますが、黙示録を除いて、すべてが「愛に生きよ」と言っています。では、ここでいう「愛」とはどのようなものか？いろいろな表現がありますが、人の行いの現れとして記述されている箇所を紹介しましょう。

コリント人への第一の手紙：第十三章 4～8 節「愛は寛容であり、愛は情け深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、無作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。愛はいつまでも絶えることはない。(口語訳聖書より)」神の愛に満たされるならこのような愛の行いが普通にできるようになるので意識してくださいとパウロが信徒たちに語っています。信徒たち全員がこうした愛に生きることができていたわけではなかったからです。

このような愛の実現・実行は人の行いの力や努力で実現できるものではありません。ただ、神の霊（聖霊）の導きに従うのみです。ある面で、自分の行動を神に丸投げするような生き方でしょうか？（丸投げした相手を間違うと大変ですが。）

結局、新約聖書は、愛に生きることとその真理を紹介していると思いつながら読むと分かりやすいかもしれません。最後に、黙示録は、悪との戦いの末、神の勢力が勝利し、最終的に「神の国」が実現される希望と夢を預言しています。そして、新約聖書全体は、この希望が絶望に終わらないことを語っています。

今回は、「愛」をテーマに新約聖書の紹介を主にしましたが、十分な紹介は到底出来ていませんのでご勘弁ください。旧約聖書にも神が人間を愛し、大切に思っている箇所はいくらでもあります。また、生々しい人間の生きざまもたくさん書かれています。次に機会があれば、旧約聖書から面白い箇所を紹介したいと思います。